

ガーヴェイ以後のジャマイカにおける ガーヴェイズムとUNIA

鈴木 慎一郎

I はじめに

この稿ではマーカス・ガーヴェイ (Marcus M. Garvey, 1887-1940) の思想と彼以降の諸言説との呼応について論じる。ガーヴェイは、世界中の黒人を国民とする一つの国家が創られるべきだと主張し、またその物質的側面を支えるための経済と産業の自立を推進した、ジャマイカ出身の黒人運動家である。

筆者はこれまでカリブ海地域を対象に人種や階級をめぐるヘゲモニーの維持とそれに対する抵抗について研究を進めている。中心に研究したのは現代ジャマイカにおけるラスタファラーイ (Rastafari) という社会宗教運動に関してである⁽¹⁾。ジャマイカでは植民地主義あるいは新植民地主義に抗する思想や運動が奴隷制時代から脈々と続いており、ラスタファラーイはその系譜に位置づけることができる。ラスタファラーイは1930年代生まれの運動であり、この時期はガーヴェイの晩年に当たる。

ガーヴェイの活動がもっとも華々しかったのは、彼がジャマイカを離れて主にアメリカ合衆国に滞在していた1916年から1927年までの時期であった。この時期の彼は、合衆国の黒人労働者階級の中に多数の支持者を獲得し、また世界各地にその組織UNIA (Universal Negro Improvement Association) の支部を設けることができた。そのためか、ガーヴェイの思想と活動は、合衆国のブラック・ナショナリズムに関する研究、あるいは、パン・アフリカニズムに関する研究といった文脈で主題化されることが多いようである。しかしここでの筆者はむしろ、ジャマイカのローカルな思想的文脈にガーヴェイを位置づけるという視野のもと、その前段階に必要な作業の一つとして、彼の思想が後代の反植民地主義的運動にいかに関与したのか、整理を行なう。

II ガーヴェイおよびガーヴェイズムとジャマイカ政治

ガーヴェイズムを逃避的で非現実的なアフリカ帰還思想ととらえる否定的評価はたびたびなされてきた。とりわけガーヴェイと同時代の論者⁽²⁾や、ブラック・パワーの隆盛の中でガーヴェイが肯定的に回顧されだす1960年代よりも以前の論者⁽³⁾の間では、この種の否定的評価は優勢であった。実際にガーヴェイは西欧在住の黒人をリベリアに移住させるという計画を推進した。また彼は、合衆国の黒人知識人のうち融和主義を唱える派を厳しく攻撃し⁽⁴⁾、黒人国家としての分離独立を主張した。

しかしガーヴェイの運動はアフリカへの移住のみを志したものではなかった。ガーヴェイに関する研究が進むにつれ、運動内部における国内問題重視路線や、各UNIA支部の活動

の地域的多様性についても知られるようになった⁽⁵⁾。

生まれ故郷ジャマイカの脱植民地化にむけてのガーヴェイのヴィジョンは、彼が1929年に結成した政党 PPP (People's Political Party) の綱領に示されている。ガーヴェイは郵便をめぐる詐欺で有罪判決を受けて1927年に合衆国からジャマイカへ強制送還されたが、1929年からの数年間は、彼がその精力をジャマイカの政治改革へともっとも費やした時期であった。この間ガーヴェイはキングストンおよびセント・アンドリュース行政教区の地方自治体議員に当選したが、彼を含む PPP の候補者が植民地議会の議席を獲得することはなかった。しかし PPP の綱領に掲げられたいくつかの課題、例えば労働条件の改善、土地の再配分、大学や技術学校の設置などは、後の労働組合や政党によって実際に取り組まれることになった⁽⁶⁾。そこでまず、ジャマイカでの労働組合や政党の誕生期におけるガーヴェイの影響をみることにする。

II-1 1938年の労働紛争と二大政党の誕生

新聞報道⁽⁷⁾によれば、1994年6月11日にニューヨークのブルックリンで、ガーヴェイの没後54年を記念する式典が、息子であるガーヴェイ・ジュニアにより開催された。報道はガーヴェイ・ジュニアの次のような発言を引いている。「世界はガーヴェイのことをよく知っている。わたしがアフリカに行けば、その辺の街角の人でもガーヴェイのことを知っている。いっぽうジャマイカは、世界の中でもガーヴェイに関する知識がもっとも乏しい所の一つである。それは偶然ではなく仕組まれたものである。なぜなら、政治家たちは過去40年間にわたって、ガーヴェイのそれとは正反対の教えやイデオロギーを推進してきたからである。」

確かに、ジャマイカ社会の現状はガーヴェイの教えの成就には遠いかもかもしれないが、彼の思想は彼が創った組織の枠を越えて後代のさまざまな社会運動に影響を与えた。ガーヴェイの支持者は今日の二大政党⁽⁸⁾である JLP (Jamaica Labour Party) と PNP (People's National Party) の結成にも重要な役割を果たしており、また政策の中にはすでに何十年も前にガーヴェイによって提唱されていたものが少なくない。

ガーヴェイは1935年に活動の拠点を英国へと移したが、ジャマイカはその約3年後に全島規模の労働紛争（それは暴動に発展した）を経験する。この1938年の暴動は民主化への圧力となって結果的に1944年の普通選挙法をもたらした。これによって21才以上の全ての男女は選挙権を得た。同年には政体もより民主的な方向に改められた。つまり英国の支配が弱められ、普通選挙で選ばれた代議士から構成される議会の権力が増した。

1938年の暴動は、ウェストモerland行政教区の砂糖きび農場の労働者によるストライキに端を発し、同様の紛争が全島各地に飛び火したものである。これらの労働紛争を率いたのは、セント・ウィリアム・グラント (St. William Grant, 1894-1977) とアレグザンダー・ブスタマンテ (Alexander Bustamante, 1884-1977) だった。グラントは1920年代初めに合衆国へ密航し、UNIA の軍事組織の役職につき、さらに UNIA ハーレム支部の「虎」部隊の長を務めた。グラントは1934年ジャマイカでの第7回 UNIA 国際会議に参加するため帰国したが、非合法に渡米し滞在していたために合衆国への再入国は不可能だった。ジャマイカでのグラントは植民地主義を攻撃する熱心な政治活動を続け、首都キングストンの中心部にあるクイーン・ヴィクトリア・パーク⁽⁹⁾で盛んに演説を行なった。ブスタマンテが最初の

演説を行なったのも、グラントによるこのような集会の一つであった。

暴動の際には共に逮捕された二人であったがその後の運命は対照的であった。プスタマンテは1938年に労働組合を結成して労働者の多大な支持を獲得する。さらに1943年に政党JLPを結成し、翌年の選挙に勝って首相となる。1954年には英女王からナイトの称号を授かる。いっぽうグラントは、1940年代初期にプスタマンテの労組を離れた後は目立たぬ存在になってしまい、貧しさの中で生涯を終えた⁽¹⁰⁾。

二大政党の他方 PNP は、1938年の暴動の数カ月後に弁護士のノーマン・マンリー (Norman Manley) によって結成された。N・マンリーは、海外資本の大貿易会社に対するバナナ耕作民の利害を法廷で代表するという仕事を通じて、貧困民の生活に直面してきた。プスタマンテの労組と初期の PNP とは密接な協同関係にあったが、プスタマンテは PNP が彼の労組を再組織化するのを恐れ、また PNP の社会主義的要素を嫌い、結局 PNP と袂を分かち、JLP を結成した。

後の70年代に比べれば、当時の二大政党の主義や政策にはより共通点が多かった。どちらの政党も1930年代後期から40年代初期にかけての社会運動の産物である。つまり、白人や混血のプランター層の発言力が強かった立法・司法・行政組織を脱植民地化・民主化し、かつ下層の黒人系住民の生活水準を向上させようという運動である。二大政党の結成におけるガーヴェイズムの功績が評価されるのも、この脈絡においてである。

II-2 60年代後期のラディカリズム

ガーヴェイの思想が再びクロズアップされるのは1960年代半ばからのことである。ジャマイカでは62年の国家独立の後も、独立とは名ばかりで脱植民地化は未だ不完全であるとの声が大衆や知識人から絶えなかった。中産階級によるリーダーシップは、人口の大半を占める下層民の支持を必要とする一方で、資本の大部分を握る上層の住民や海外企業の利益を保護しなければならないという不安定なものであった。

現地の最高教育機関である西インド大学の教員や学生からは、社会主義のグループや、自国資本に基づく経済の発展を唱える経済的ナショナリズムのグループや、ブラックパワー運動などが生まれてきた。また大学の外では、アフリカの文化の復権を唱えるラスタファーマーライの運動が展開していた。ラスタファーマーライの依頼に応じて彼らに関する調査報告書を1960年に発表したのもこの大学の教員だったが、その報告書は政府の眼にはラスタファーマーライの思想に対して好意的・同情的であり過ぎるように映った。当時のキャンパスには社会を積極的に批判していこうという機運が満ちていた。JLP 政府と首相ヒュー・シェアラ (Hugh Shaerer) は、教員の解雇や国外追放、黒人運動に関する著書 (マルコム・X やストークリー・カーマイケルの著書など) の禁止、表現の検閲などをもって対処した⁽¹¹⁾。

前述のさまざまな思想、つまりブラックパワー、社会主義や経済的ナショナリズム、そしてラスタによる文化的ナショナリズムを、カリブ海地域の社会背景をふまえた上で総合し、さらに大学の壁をこえて労働者や失業者の間での大きなアピールを勝ち得たのは、西インド大学の歴史学者ウォルター・ロドニー (Walter Rodney) であった。彼を危険人物視した JLP 政府は1968年10月、ロドニーが一時海外へ出国したのを機にその再入国を拒否した。これを知った学生らは翌日街頭へのデモを行なったが、学生以外にも巻き込んだこのデモは警

察により武力をもって鎮圧された⁽¹²⁾。

しかし、大学内のラディカリズムはこれで根絶させられたわけではなかった。社会科学系の教員らによって週刊紙 *Abeng* ⁽¹³⁾ が1969年2月に発刊された。政府に与しない、また既存の新聞には決して掲載されないような意見を述べる場として *Abeng* は作られ、発行部数は最盛期には14,000部に昇った⁽¹⁴⁾。

Abeng の紙上は次のような題材で占められた。第一に、現行の警察と司法システムへの批判。貧しい黒人系住民は警察による不当な暴力の対象になりがちであり、裁判の判決も彼らにとって不利なものになってしまうとの批判である。この点に関してガーヴェイはすでに、1929年のPPPの綱領の中で司法システムの改革を唱えていた。例えば彼は、他と共謀して審理を遅らせようとする法律家を罰する制度や、法的代理人を確保することが困難な人々を援助する組織の設立を提案していたのである。

題材の第二としては、文化的ナショナリズムやアフリカの文化の賛美がある。ラストファーストの表現に加え、ガーヴェイの残したスピーチの直接引用は紙面を飾った。ネーション・オヴ・イスラムのジャマイカ支部やガーヴェイ・ジュニアも、この題材をめぐり頻繁に寄稿した。第三の題材としては、国家経済が白人の海外資本に占められることへの抗議がある⁽¹⁵⁾。

Abeng にはしかし、ロドニーが一度総合した異なる思想間の反目が徐々に露骨になっていった。文化的ナショナリズムは弱まり、代わって社会主義への比重が強まった。ところで、ジャマイカ社会の不平等は人種と階級とのどちらに帰着するのかは、現地の論者を二分する問題であった。文化的ナショナリズムを唱える論者は主に不平等の起源をレイシズムに見出したいっぽう、社会主義者はいうまでもなく資本家による搾取にその起源を見出した。*Abeng* においても両者の対立が顕わになってきた。例えばガーヴェイ・ジュニアは、社会主義や共産主義は結局のところ白人が考案した社会理論であり、われわれ黒人はそれを盲目的に自社会に適用することはできない、むしろこれらの主義は黒人を資本家と労働者に分けて人種内部に分裂をきたすという弊害をもたらす、と同紙に書いた⁽¹⁶⁾。*Abeng* には、資金難の問題や、内容が難解だという一般読者の批判もあり、発刊後10カ月で廃刊した。しかしながら、大衆が現行の社会と権威主義的なJLP政府への不満を表す場を得たことにより紙上にあまたの意見が溢れたという事実は、当時のJLP政府の黒人下層階級間での支持基盤の危うさを示している。

いっぽうJLPは、これを察知した上での、黒人下層階級間での支持を確実にするための戦略ともとれる動きもみせた。1964年にガーヴェイの遺骸をロンドンからジャマイカに輸送して墓に埋葬し、彼を最初のナショナル・ヒーローに定めたのは当時のJLP政府であった。1966年にエチオピア皇帝ハイレ・セラシエ (Haile Selassie) がジャマイカを訪問したのも、JLP政府の招聘によるものであった。また1969年、首相シェアラーはアフリカ諸国を訪問して友好を深めようとした。

II-3 70年代PNP政府のポピュリズムとその後

1972年の総選挙でJLPを倒してPNP政権の首相となったマイケル・マンリー (Michael Manley) は、旧約聖書中のヨシュアを名乗り、貧しい黒人系住民の救世主として自分を祭

り上げた。実施された政策としては、JLP 政府がしいたある種の出版物の禁止の解除、選挙権年齢の引き下げ（21才から18才へ）、大土地所有者の土地の再分配、公営住宅の建設、価格統制、最低賃金の引き上げ、大学授業料の無料化、文盲率低下を狙った成人教育プログラムなどがある。これらのうち、例えば土地の再分配、最低賃金の引き上げなどは、やはりすでにガーヴェイによる PPP の1929年の綱領に示されていたものである。同綱領はまた先述のように教育機関の重要性や住宅問題なども指摘していた。

1974年にM・マンリーは民主社会主義路線を打ちだし、海外資本に頼らない、国家の経済統制による自助自立的発展を理想とした。自助自立こそガーヴェイの思想の根本にあった原則である。M・マンリーは同年の自著の冒頭で父N・マンリーの言葉とともに自助自立に関するガーヴェイの言葉を引用し、また本文でも自助自立の原則について多くの頁を割いている⁽¹⁷⁾。

一方M・マンリーの過激な語り口、例えば「ジャマイカは売り物ではない」、「（私有財産にすがりつきたい者は）1日に5便あるマイアミ行きの飛行機に乗って合衆国へ移り住むがよい」などの発言や、他の社会主義国との連携強化は、資本の国有化を恐れた海外企業の撤退や国内の富福層の海外移住を現に招来した。まだ東西陣営間で冷戦が繰り広げられていた時代であり、ジャマイカでもこの世界情勢を反映し、両陣営の諜報機関が国内で暗躍したといわれる。また石油危機による世界経済の停滞もあり、ジャマイカ経済はインフレーション、物価高騰、外貨不足、物資の不足、失業率増加、マイナス成長など救いようのない状況へと落ちこんだ。皮肉にも無料の大学教育の恩恵を受けた者の多くは海外へ移住し、優秀な人材の流出が起こった。もう一つの皮肉は、この経済の衰退によりジャマイカは世界銀行やIMFなどの融資に手を出すことになり、国内の政策においてこれらの機関がしいたコンディショナリティーに従わざるを得なくなったことである⁽¹⁸⁾。こうして70年代PNP政権は、ガーヴェイが理想とした自助自立の原則に基づく社会とは正反対の状況を招いた。これが、IMFの名称がM・マンリーの名をもじって“Is Michael Fault”（it is Michael's fault）とか“Is Manley Fault”（it is Manley's fault）、つまり「マイケル（マンリー）のせい」と冗談まじりに呼ばれているゆえんである。

そのキャンペーン中に党派間抗争による多数の死者を出した1980年総選挙の結果、JLPが政権を奪回した。首相エドワード・シアガ（Edward Seaga）は自由市場経済を推進し、海外資本の投資を促進、かつレーガン政権との絆を強めた。経済は一見好転したかのようにあったが、すでに1983年には物価上昇、高失業率、低成長率などの問題が再び頭をもたげた。下層住民の間では、JLPは富福層の利害を代表する政党との印象が定着しつつあった。路上での物品販売を禁じる政策や大学教育を有料化する政策を実施したのもこのJLP政権である（これらの政策は現PNP政権により継続されている）。JLPがもたらしたこれらの政策は、貧富の格差をより拡大したといわれている⁽¹⁹⁾。

これらの経緯をみる限りでは、ジャマイカの政治的リーダーたちは、ガーヴェイに敬意を表したり影響を受けたりして、しばしば大衆の代弁者であるかのようにふるまうものの、結果的には国はガーヴェイの理想にはまだ遠い状態にあるようである。先ほど引いた、国政に対するガーヴェイ・ジュニアの告発は、この意味では納得のいくものといえる。

III ガーヴェイとラスタファールライ

III-1 ラスタファリアンへの態度

冒頭で述べたようにラスタファールライは現代ジャマイカにおける反植民地主義的運動である。その担い手ラスタファリアンたちはガーヴェイの後継者を自認する。また初期のラスタファリアンにはそれ以前にガーヴェイの支持者であったという者が少なくないとされる。したがってガーヴェイ以後のガーヴェイズムの影響を考える時にラスタファールライを避けて通ることはできない。ここでは両者の差違に着目してみたい。

ガーヴェイもラスタファリアンと同様に旧約聖書詩篇68篇31節⁽²⁰⁾を頻繁に引用して、1930年代にイタリアに侵攻されるまでヨーロッパに植民地化されることがなく長い歴史を持つ王国エチオピアを讃えた。ガーヴェイとラスタファールライの双方にとりエチオピアは、アフリカ大陸在住の黒人と奴隷貿易ゆえに離散した新世界の黒人の、威厳の象徴となった。どちらもエチオピア国歌を（ガーヴェイは彼の計画した黒人国家の国歌として）採用している。またラスタファールライの運動誕生には、ガーヴェイが残したとされる預言が重要な役割を果たしたという説がある。すなわち、ある時ガーヴェイが「アフリカを見よ。黒い王が戴冠する時、解放の日は近い」と語ったことがあり、それを聞いていた者たちが、1930年のエチオピアでのハイレ・セラシエの戴冠に預言の成就をみた、というものである。また多くのラスタファリアンは、ガーヴェイを「黒いモーゼ」あるいは「バプテスマのヨハネ」として敬う。

しかしながら史料の検討によれば、前述の預言が実際になされたことを裏づける記録はなく、むしろガーヴェイはラスタファールライに対して冷淡で、またセラシエにも批判的であったという方が真相に近いようである⁽²¹⁾。さらに神に関する観念に関しても、ガーヴェイとラスタファールライの間には根本的な相違があった。

ガーヴェイはメソディストの家庭に生まれ、後にカトリックに改宗するが、いずれにせよ彼が自分の神を呼ぶのに使った名はあくまでキリストであった。UNIAは特定の宗教を団体の正式な宗教として制定することはしなかったため、例えば合衆国のメンバーにはイスラム教徒も少なからずいた。

前述のようにセラシエが皇帝に即位したのは1930年であり、ガーヴェイは少なくとも35年まではジャマイカを中心にして活動していたから、ガーヴェイはこの新しい宗教が誕生した時に間近にいたはずである。しかしながら、ガーヴェイがラスタに対し好意的な見解を抱いていたという記録は見当らず、ある新聞記事中では批判的な見解を示している。さらにガーヴェイは、セラシエの写真をUNIAを通じて販売したいというハウエル（初期のラスタファールライのリーダー）の申し出を断ったと伝えられている⁽²²⁾。

III-2 セラシエの評価

ラスタファリアンは、セラシエを神として崇拝、あるいは偉大な王として特別に尊敬する。しかしガーヴェイは、国家のリーダーとしてのセラシエの内政と外交の采配のまずさを指摘していた。ガーヴェイは、エチオピアが封建的土地制度を残し、軍事、産業、経済の発展が遅れたのは、セラシエが近代化への努力を怠っているためであり、それがそもそもイタリア

の侵攻を許すことになった、と述べた。エチオピアの王朝はエチオピア正教と伝統的に密接な関係にあり、皇帝セラシエはその信仰の擁護者でありかつ敬虔な信者であったと伝えられているが、ガーヴェイは、(ムッソリーニが機会を積極的に利用して攻めてきた時に)「愚かなセラシエは、神が助けにやってくるよう祈るだけであった。神がわれわれのために銃を作って送ってくれるなどと思ってはいけない」⁽²³⁾と批判している。またガーヴェイは、セラシエは西欧諸国の顧問に頼りすぎているとし、なぜ同じアフリカの近隣諸国や新世界の黒人に援助や協力を依頼しなかったのかと問う。特に、セラシエがイタリア侵攻後英国に亡命し、ガーヴェイの言うところの白人の機関である国際連盟に調停を嘆願したことは自殺的行為である、とガーヴェイはいう⁽²⁴⁾。

ところでエチオピア王朝は、聖書中のイスラエル王のソロモンとシェバの女王との間に生まれた子に端を発するとの神話に基づいているが⁽²⁵⁾、ガーヴェイはその起源神話にもふれ、もしソロモン王の子孫であるということがセラシエにエチオピアは他のアフリカ諸国よりも高貴な国であるという優越感を持たせるのならば、そのような伝統などかなぐり捨てられなければならない、という内容の発言をしている⁽²⁶⁾。

III-3 神をめぐる観念

ガーヴェイは上の発言に続いて「黒人はソロモンの血統に何の価値も見いださない。ソロモンは大昔に死んだ。ソロモンはユダヤ人だった。黒人はユダヤ人ではない。黒人の血統はシェバからずっと続いているのであって、黒人はそれを誇りに思っている。黒人はシェバのことを誇りに思っているが、ソロモンのことは誇りに思っていない」と述べる。

ガーヴェイのこのような聖書解釈はラスタのそれと随分異なっている。第一にラスタは、ソロモン王は黒人であった、なぜならソロモンの祖父エッサイは黒人であったから、とする。ソロモンの父でエッサイの息子であるダヴィデ王も同様に黒人である。それゆえ、彼らの解釈によれば、セラシエがソロモンの子孫であるのであれば、セラシエが黒人であることは必然である。第二に、聖書はイスラエルの民に関する書物であると言って差し支えないが、ラスタは、黒人こそが聖書に書かれているイスラエル人であって、中東にイスラエルを建国した民族は偽イスラエル人である、とみなす。

次に、神の肌の色の問題に関して、すぐ上に述べたように、多くのラスタファリアンにとっての神セラシエは、現実にこの世に存在し目に見える肉体を持った神である。肉体を持つゆえに、神は特定の人種分類に属し、そしてそれは黒人である。一方ガーヴェイの神観念は、神にはそもそも色がなく信仰する人によってそれは異なってくる、というものであった。いわく、神はスピリットであり、目に見える肉体を持たない。しかし各人種は神をそれぞれの「眼鏡」を通して見てきた。白人は神を白い肌を持つ存在として、黄色人種は黄色い肌を持つ存在として、イメージし崇拝してきた。それならば、黒人が「エチオピアの眼鏡」を使って神を見れば、その神の色は黒くて当たり前、というのがガーヴェイの用いた論法であった⁽²⁷⁾。

Ⅳ 今日のジャマイカのガーヴェイズムとUNIA

ジャマイカにおけるガーヴェイズムとUNIAは今日どのような状況にあるのか。この節では1994年に筆者が数十年来のUNIAメンバーである二人の男性、フランク・ゴードン（Frank Gordon）氏とルパート・ベイリー（Rupert Bailey）師に行なったインタビューを主な資料とし、ジャマイカのUNIAをめぐる状況を概観してみる。

Ⅳ-1 組織性の問題

ガーヴェイの時代に比べてUNIAが弱小化しているのは否定できない。ゴードン氏の言葉によるなら、今日その組織は明確な構造をとらない。ベイリー師によれば、数人を除いて誰がUNIAのメンバーであるかは容易に確定できないほど、そのメンバーシップは不明瞭である。彼によれば、それは組織の活動を脅かしたり利用しようとする力からUNIAを保護するという戦略的なものである。同じく彼によれば、UNIAの思想や哲学はごくごく当たり前で普遍的な真理であるゆえ、UNIAはその賛同者のためにいつでも開かれた組織であり、したがってメンバーシップを限定することもできない。しかし誰も彼もがUNIAのメンバーを名のれば即メンバーになるというわけではなく、それには年長のメンバーの是認が必要とのことである。

UNIAの活動が低調なのには、一つにはJLPとPNPによる二大政党制の浸透が大きく関係しているといえる。大衆はその利害を国政レベルで代弁させるための有効な機会を持たない。「多くの人々から一つの人々を」という多人種一国民のイデオロギーを基本に掲げる両政党は、階層間格差の問題にこそ取りくんできているものの、社会内に人種間不平等があるのか否かという問題は巧みに避けてきた。したがって、黒人の地位向上というまさにこの問題を提議するUNIAは、国政への直接の影響力をもたらすことができないでいる。

また、JLPとPNPがそれぞれの本部や各選挙区の事務所を構えてコミュニティーに支持基盤を確立してきたのに対し、UNIAはその拠点リバティー・ホール（Liberty Hall）を失ったままである。キングストンのダウンタウンにあるリバティー・ホールは、かつては定期的な集会の他、演劇・弁論大会・舞踊・音楽などのUNIAの文化芸術活動の練習と発表が行なわれた場所であった。リバティー・ホールの土地と建物は、今日はジャマイカ政府により所有されているものの、全く使用されていない。

ジャマイカでの強力なリーダーシップの欠如や、合衆国にあるUNIA国際本部との連絡の不徹底という問題もある。かつてはある人物が当時の国際本部のプレジデント・ジェネラル（UNIAの国際的リーダーにあたる地位）により、ジャマイカ支部のコミッショナーに任命され、国際集会に出席したものであったが、この人物はジャマイカ支部の活動を発展させることはできず、定期的な集会も催さなかった。この人物の死後はジャマイカ支部は中心的なリーダーシップを欠いてしまっている。いっぽう国際本部ではガーヴェイ・ジュニアがプレジデント・ジェネラルの地位を引き継いだが、その後国際本部の活動の詳細はゴードン氏の周辺にまでは届いてきていないとのことである。ベイリー師はジャマイカ支部のスペシャル・レプレゼンタティブという地位にあるが、それは国際本部とそのプレジデント・ジェ

ネラルをジャマイカにおいて代表する役割だとのことである。

現在ジャマイカの UNIA は主に数人の年長の男性・女性からなる。これらの人々は、UNIA の思想の流布や新メンバーの勧誘にはあまり積極的ではないが、例外がベイリー師である。彼は健康的な理由のため以前ほど活動的ではないが、何年もの間にわたって西インド大学や各カレッジや各地のコミュニティをはるばる巡回し、若年層を対象に UNIA の思想を説き、新入会員を募ってきた。

IV-2 その諸活動

先述のようにジャマイカの UNIA の活動はガーヴェイの死後著しく衰退したが、それでもガーヴェイ生誕百周年にあたる1987年には、記念行事の準備から実施にかけて集会が頻繁に開かれた。西インド大学ではガーヴェイに関する国際会議が開かれ、当時の首相M・マンリーや学者たちやガーヴェイの未亡人に並んで、ガーヴェイ・ジュニアが彼の亡父と UNIA 国際本部を代表してスピーチを行なった。またこの会議では、ガーヴェイの思想と業績の学校教育カリキュラムへの導入⁽²⁸⁾、アフリカ大陸の解放、マンデラをはじめとする南アフリカ共和国の政治犯の釈放、ジャマイカの黒人系住民の生活水準の向上、JLP 政府による大学教育有料化への抗議などが議題となった。

生誕百周年記念行事が行なわれた1987年以降も、毎年8月17日にはガーヴェイの誕生日を祝う行事が UNIA により開催され続けている。この行事は政府の教育文化省の文化発展委員会の援助を受けて行なわれ、当日にはナショナル・ヒーローズ・パークにあるガーヴェイの墓と胸像に献花が行なわれる。ここ数年では、ラスタファリアンやミュージシャンの協力により、8月17日周辺にガーヴェイの生誕を祝うコンサートも行なわれている。また1994年はグラントの生誕百周年にあたり、ゴードン氏がリーダーを務める組織、ジャマイカ・パイオニア・ムーヴメントはそれを祝う礼拝や晚餐を企画していた。

運動の資金集めも重要な課題である。ベイリー師は1989年、アフリカン・エコノミック・リバレーション・ファンドという基金を提案した。ベイリー師によれば、生前のガーヴェイは全世界の黒人を解放して自助自立的な経済基盤を確立する計画には5億 US ドルかかると思積もっており、現在では同様な計画にはそれ以上の莫大な金額がかかるとのことである。この寄金は、黒人の地位を向上するためのあらゆる計画に使われることが意図されている。この寄金は IMF や世界銀行への第三世界諸国の依存を断ち切らせるという目的も持っている。ベイリー師はレゲエ・アーティストらに対しコンサートの興行収入を寄付することを呼びかけた他、各教会にも援助を募った。ガーヴェイの思想はよく知られているように多くのレゲエの曲に採りあげられている。したがってアーティストに寄金を呼びかけるのは正当であるとベイリー師はみなしたのだろう。またベイリー師は、ある人種が苦しみば世界の他の人種も苦しむことは必然であるとし、特に黒人に限らず他のあらゆる人種、民族、国家からの援助を歓迎すると述べた。

基金の問題と関係したところでは、永年議論され続けている賠償金の問題がある。西欧諸国は数百年続いた奴隷制を償うための賠償金を黒人に対し支払うべきである、と黒人運動家たちは主張してきた。第二次世界大戦中にナチスの迫害を受けたユダヤ人や、同時期の合衆国の日系人に対しては後に賠償金が支払われているので、黒人に対しても同様の賠償金が支

払われるべきだという。合衆国議会では何度かこの賠償金の問題が議案に乗せられている。1992年1月、一部のラストファリアンによってニューヨークの年長のガーヴェイ派であるクイーン・マザー・ムーア（Queen Mother Moore）がジャマイカに招かれ、首相や野党党首や総督と会談の機会を持った。彼女の訪問は、アフリカ帰還の問題と共にこの賠償金の問題に再び関心を促した。

Ⅳ-3 マーカス・ガーヴェイ・コミュニティ・カレッジ

この節ではマーカス・ガーヴェイ・コミュニティ・カレッジにもふれておく必要がある。この学校の母体は、70年代 PNP 政府による成人教育プログラムの機関の一つ、ショートウッド・アダルト・エデュケーション・センターであり、それは1981年にショートウッド・コミュニティ・カレッジと改名、さらにその後今日の名称へと改名した。このカレッジでの教育に重要な役割を果たしてきているのが、シスター・セマド（Sister Samad, あるいはマダム・セマド）という女性である。合衆国生まれの彼女は、少女時代からニューヨークの UNIA のメンバーであり、1976年以来ジャマイカに移り住み、1981年から当カレッジでガーヴェイの思想や黒人の文化と歴史に関するクラスを担当してきている。このカレッジは1988年、土地の所有者であるカトリック教会により立ち退きを余儀なくされるという憂き目にあったが、1991年にキングストンの別の場所に移って運営を続け、さらに他の行政教区内にも分校を構えた。

ゴードン氏は、マーカス・ガーヴェイ・コミュニティ・カレッジにはガーヴェイズムの気風が生き続けているという。彼によれば、このカレッジは他の学校の授業についていけない学生や、二次教育修了後の共通試験の成績が芳しくない学生を特に指導し、黒人だから云々という否定的ステレオタイプに打ち勝つことのできるような、自己や白人種への揺るぎない確信を植えこむことによって、彼らを試験の成功やさらには社会生活の成功へと導いていくような学校である。

このカレッジは政府の認可を受けており、筆者が訪問した1994年には、ハイスクールの諸科目、共通試験の諸科目に加え、簿記・タイプ・コンピューター・秘書・経営学・商学・マーケティングなどの実業的な科目の他、電子工学・洋裁・服装デザインなどの技術的な科目など、多岐にわたったコースを開講していた。また、将来的に移転を行ない、さらに広い年齢層のためのクラスを開講したりガーヴェイの業績と哲学に関するリサーチセンターを設立する計画も持っていた。

キングストンのキャンパスの図書室には、黒人の歴史やアフリカ研究に関する文献のセクションもあり、大学の学生や研究者もしばしば調べものに訪れるとのことであった。その壁には、学生によって描かれたアフリカ大陸の地図や、ガーヴェイをはじめとしてマルコム・X、ボブ・マーリー、ハイレ・セラシエ、アムハ・セラシエ⁽²⁹⁾などの人種のヒーローの写真が飾られていた。壁には校長のC・ンクルマ氏による「ショートウッド・コミュニティ・カレッジの誓い」も掲げられおり、その内容は「私たちはアフロ・ジャマイカンである。私たちは祖先の持っていた人間らしさや、その栄華や苦しみを忘れず、また私たちのリーダーたちの戦いぶりを讃える」「私たちは故郷を再び活気づけ団結させるために努力する」「私たちは教育を通じて黒人を解放する」などであった。

Ⅳ-4 ガーヴェイズムの現代的意義をめぐる言説

ガーヴェイの創始した運動に現代的な意義があるとすればそれはどのようなものであろうか。この点をめぐる諸言説は次の通りである。

UNIA という組織はとりわけ秩序と規律を強調した組織として知られている⁽³⁰⁾。それはまず少年少女によって構成される部隊を下部組織として抱えていた。少年少女のためには日曜学校もあった。彼／彼女らはそこで UNIA の教理やガーヴェイ自身による詩を学んだ。これとは別に、女性のみから構成される、軍事教練や自動車の運転の習得を目的とした部隊があった。軍事教練や集会中の警備を行なう、成人男子からなる部隊や、応急処置を担当する看護婦の部隊もあった。UNIA の集会の際には、これらの下部組織はそれぞれの制服に身を包み、隊列をなして行進した。UNIA のメンバーはまた、白人種を傷つけるようなことは決して行なわないとの宣誓を立てた。

UNIA の規律にはより具体的な生活様式に関するものもある。ゴードン氏によれば、キングストンのリパティー・ホールで行なわれる集会では喫煙が禁じられていた。また同じゴードン氏によれば、黒人女性は人種の母としてふさわしい尊厳をもってふるまうべきとされ、喫煙がタブーであった他、スカート以外の例えばパンツやショーツなどの肌をあらわにする衣服の着用は、女性の尊厳を軽んじるものとして禁じられた。

UNIA のメンバーはこれらの規律や活動を通し、自らの人種に対する誇りや使命感を身につけ、統制のとれた人種的団結を実現することが期待された。ガーヴェイは、黒人の間での白人種に対する卑下や劣等感を、人種の地位向上への最大の障害として、ある意味では白人による黒人に対するレイシズム以上に憎んだのである。ゴードン氏は、ユダヤ人やパレスチナ人をはじめさまざまな民族や人種が各々の利害のために団結している今、黒人も同様に一つの人種、一つの人間集団として、地球上のどこに在住しているに関わらず統一、団結しなければならないと語っており、さらにガーヴェイのしいた諸原則はその団結に必要不可欠なものであり、それらの諸原則は時代を経ても変わりようのないほど普遍的で根本的なものである、とも語った。

ガーヴェイズムの現代的意義に関するゴードン氏の以上のような見解は次のような背景に照らして理解されるべきである。第一に、黒人系住民の間での白人種に対する卑下や劣等感は今日でも存在するといつてよい。この点でよく言及されるのは、容貌をめぐる美醜の価値観である。「悪い」頭髪、「悪い」鼻などの語がだいたい何のことを指すのかといえ、縮れた頭髪や低い鼻のことである。女性の肌はブラックに対しよりブラウンである方が美しいとされる。さらに、口論の際にはブラックという語はしばしばあたかも侮蔑語であるかのように使われることがある。

第二に、現代のジャマイカ社会に欠けているのはまさにガーヴェイが強調したような秩序や規律に他ならないという論説も珍しくはない。メディア上には、犯罪・ドラッグ・家庭内暴力の蔓延といった顕著な問題を嘆く声に限らず、あらゆる社会階層を通じて全体的なモラルが低下し、人々がより物質崇拜主義へと傾き、勤労や正直や誠実さといった価値観が過去のものとなりつつある、という言論があふれている。

V おわりに

以上本稿では、ジャマイカというローカルな舞台でのポピュリズム、ラディカリズム、人種意識などの言説において、ガーヴェイおよびガーヴェイズムのいかなる相が参照されてきたのかを、現地調査で得た資料もまじえつつ論じた。ガーヴェイをジャマイカさらにはカリブ海地域の思想的文脈に適確に位置づけるには、さらに次のような作業が有意義であると考えられる。

既述のように国家独立後のジャマイカ政府はガーヴェイをナショナル・ヒーローに選んだ。「ナショナル・ヒーロー」とはつまり、国民創出の物語における（国家にとっての）「正統な」地位をその人物に用意し国民に認知させる装置だといえる。これによって国家はまた、その人物を表象する上で他の誰よりも特権的な存在であることを自認する。その人物に関する矛盾し葛藤しあう諸言説は排除され、一様化した言説が起ち上げられる⁽³¹⁾。ガーヴェイの場合、彼は一見したところ矛盾した言動に満ちており、また人種主義的・純血主義的と評された面も強く持ち合わせていた。しかし国家に表象されるガーヴェイ像は、ジャマイカの国民を抑圧と自己嫌悪から救い出した偉人であるものの、人種主義・純血主義的な面については積極的には描出されていないようである。これらの面は人種間の統合を旨とする国是にそぐわないためと考えられるが、国家に表象されるガーヴェイ像に関してはさらに実証的な考察が必要だろう。

もう一つはジェンダーやセクシュアリティと関わる問題である。被抑圧者やマイノリティの運動は、その内部に男性による女性の抑圧を含んでいる場合がしばしばある。すなわち、集団の自己憎悪を克服するためには集団の下部単位としての家族生活がしっかりしなければならぬ、そのためには男性が家庭の長として権威を持たなければならない、という、自己憎悪と表裏一体のものとしての家父長主義である⁽³²⁾。ジャマイカにおけるガーヴェイの運動についても、この問題を考える可能性が残されている⁽³³⁾。

註

- (1) 主な成果は、鈴木 慎一郎『ラストファースライ ―現代ジャマイカの社会宗教運動』、学位論文（課程博士）、立教大学、1996年、にまとめられている。
- (2) 例えば、トリニダード出身の急進的思想家C・L・R・ジェームズは次のように書いた。「事実ガーヴェイは、リンチに反対し、ニグロの平等の権利や民主的自由を強硬に要求するなどしたが、彼の計画は本質的にアフリカ帰還だった。そしてそれは哀れにも屑だった」。C.L.R.James, *A History of Pan-African Revolt*, Chicago: Charles H. Kerr, 1995 (originally published in 1938), p. 99. ジェームズはまたガーヴェイの運動が階級的利害よりも人種の利害を先行させた点を批判した。Tony Martin, *The Pan-African Connection: From Slavery to Garvey and Beyond*, Massachusetts: Majority Press, 1983, ch. 11.
- (3) 例えば Edmund David Cronon, *Black Moses: The Story of Marcus Garvey and the Universal Negro Improvement Association*, University of Wisconsin Press, 1955.
- (4) Tony Martin, *Race First: The Ideological and Organizational Struggles of Marcus Garvey*

and the Universal Negro Improvement Association, Connecticut: Greenwood Press, 1976, ch. 11.

- (5) 川島 正樹, 「ガーヴィー運動の生成と発展 — 第一次大戦後の米国での活動を中心として」, 『史苑』 50(1), 1990年, 49頁での要約。
- (6) Rupert Lewis, *Marcus Garvey: Anti-Colonial Champion*, New Jersey: Africa World Press, 1988, pp. 209-213.
- (7) *Star*, July 5, 1994. Kingston: Gleaner Company Ltd.
- (8) 普通選挙が初めて実施された1944年の総選挙から本稿執筆時(1997年10月)に至るまで, JLP と PNP は二期ずつ交互に政権を担当してきている。1949年の総選挙を最後にそれ以外の政党が議席を獲得したことはないが, 1995年に元 JLP 議員が結成した新政党 NDM (National Democratic Movement) は JLP や PNP と拮抗しうる可能性があるとみられており, 近々行なわれる総選挙での動向が注目されている。
- (9) この公園はその後, グラントにちなんでセント・ウィリアム・グラント・パークと名づけられた。
- (10) これについてジャマイカの UNIA のメンバーであるフランク・ゴードン氏は, ブスタマンテが人種的には混血であったことがその要因だったのだらうと, 筆者とのインタビューで語った。両者とも優れた学校教育を経てはいないが, 黒人のグラントに対しブスタマンテは混血であったため, 政界においてより権力と威信を獲得することができた, というのがゴードン氏の見解である。ところでグラントはその功績を讃えられることがまったくなかったわけではない。上述のように公園を彼にちなんで名づけたり, 1974年には彼に対して勲位の一つが与えられたりしている。
- (11) この検閲により, 例えばポピュラー音楽家のプリンス・バスター (Prince Buster) による “Pharaoh House Crash” という曲が放送禁止処分を受けたという。Pharaoh (エジプト王のファラオ) とは聖書の表現を多用するジャマイカ大衆がシェアラーにつけたあだ名である。
- (12) Ralph Gonzalves, “The Rodney Affair and Its Aftermath.” *Caribbean Quarterly* 25 (3), Kingston: University of the West Indies, 1979, pp. 1-24.
- (13) そもそも abeng とは逃亡奴隷が通信手段として使用したという笛のこと。プランテーションでの強制労働から逃亡した奴隷たちは, 山奥に独自のコミュニティーを築いて生活した。
- (14) Abeng に関するここでの記述は主に Obika Gray, *Radicalism and Social Change in Jamaica, 1960-1972*, Knoxville: University of Tennessee Press, 1991 にもとづいている。
- (15) 海外資本の進出を風刺する表現として “Pharaoh share out” というものがあつた。これは, シェアラーは国の資源を海外資本に分け与えている (share out) として, 彼の名をもじったものである。
- (16) ガーヴェイズムやその他のジャマイカの言説が階級問題をどうとらえていたかについては, Trevor Munroe, *Jamaican Politics: A Marxist Perspective in Transition*, Kingston: Heinemann, 1990, ch. 7. とところで社会主義や共産主義は白人の思想であり黒人の社会には適用できないとする考え方は, 70年代にM・マンリーの社会主義政権による「裏切り」(M・マンリーはアフリカ移住の可能性を調査する代表団を送ると約束しておきつつ履行しなかったといわれる) と, さらに社会主義革命によるエチオピア王政の崩壊(1974年)を経験してきた, 90年代のラスタファァライにも共通した見解である。
- (17) Michael Manley, *The Politics of Change: A Jamaican Testament*. Kingston: Heinemann, 1974.
- (18) 例えば増税, 公務員の集団解雇, 公共企業の民営化, 貨幣価値切り下げなど。
- (19) PNP は1980年以降社会主義路線を変更して中道路線を取った。大国間の冷戦が終結したことも

あり、1989年の総選挙でPNPが勝利した頃には、両政党間にはもはや70年代ほどのイデオロギー対立はなかった。70年代と80年代を通して両体制とも結局経済を好転させることができなかったこと、中でも世界銀行やIMFへの依存を断ち切ることができず、政策に関してこれらの機関がしいた条件をのまざるを得ずにいること、また党派間抗争が残酷な暴力を招いてきたことを見てきた今、国民の間には政治への諦念がより深まっているといわれる。1993年の総選挙は再びPNPが勝利を収めたが、全体の投票率はきわめて低いものであった。

- (20) “Princes shall come out of Egypt ; Ethiopia shall soon stretch out her hands unto God.” 後半部の訳は「エチオピアには急いでその手を神に伸べさせてください」となるが、前半部で何がエジプトから出てくるのに関しては、messengers や bronze としている聖書もある。
- (21) Robert Hill, “Leonard P. Howell and Millenarian Visions in Early Rastafari,” *Jamaica Journal* 16 (1), Kingston : Institute of Jamaica, 1983, pp. 25.
- (22) Hill, *ibid.*, p. 32.
- (23) Amy Jacques Garvey and E.U. Essien-Udom (eds), *More Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, New Jersey : Frank Cass, 1977, p. 24.
- (24) ガーヴェイ自身、これ以前に何度か国際連盟の会議に UNIA の代表を送って要求を行なってきたが、苦情の提出はそれぞれの国家の政府を通じてなされなければならないという連盟の決定のために希望を挫かれるという経験をしている。この経験が、国際連盟に対する彼の不信を形成するのに一役買ったのかもしれない。
- (25) これはエチオピアの憲法の中で述べられている。該当する聖書の箇所は、旧約聖書列王紀上10章。シェバの女王はソロモン王が智慧に優れた者であるとの噂を聞き、エルサレムの彼を贈り物を持って訪ねた。
- (26) Garvey & Essien-Udom (eds.), *op. cit.*, pp. 232-237.
- (27) この点に関する日本語文献としては、柴田 佳子、「ガーヴェイズムの経験的宗教観とジャマイカの《影》 —無色の神・黒い眼鏡・ガウン」、『アメリカ史研究』14, 1991年も参照。
- (28) ガーヴェイの思想と業績は1992年秋から学校教育のカリキュラムに採り入れられることになった。また西インド大学講師エリナー・ウイント (Eleanor Wint) 博士は、ガーヴェイの思想と活動を児童に解りやすく伝えるという目的で、絵本 *Garvey Teaches Us*, Kingston : Institute of Jamaica, 1992 を著した。
- (29) アムハ・セラシエはハイレ・セラシエの息子。
- (30) Sister Samad, Interview with Maxine McDonnough, *Jamaica Journal* 20 (3), Kingston : Institute of Jamaica, 1987.
- (31) 国民創出の物語へのある人物や事象の回収については、ジャマイカの場合やはり国家独立後に政府が「民俗」文化の「発掘」「保存」「再評価」「再活性化」に力を注いだこととも関連して考察されるべきであろう。
- (32) 例えば、ケビン 内田、「『アイス・キューブ・カルチャー』にみられる自己愛について」、『現代思想』25(11), 青土社, 1997年, 260~266頁を参照。筆者はラストファーマーライについてこの問題を若干論じたことがある。拙稿「レゲエと『語られない半分』としての女性」、『現代思想』25(11), 青土社, 1997年, 100~111頁。
- (33) 現時点では例えば以下の文献が参考になる。Tony Martin, “Women in the Garvey Movement”, in *Garvey : His Work and Impact*, edited by Rupert Lewis & Patrick Bryan, Kingston : University of the West Indies, 1988, pp. 67-72. Honor Ford-Smith, “Women and the Garvey Movement in Jamaica,” in *Garvey : His Work and Impact*, pp. 73-83.